

伊豆便り

田島 征三

今年は展覧会をイッパイやった。十二月に入って全国的に展開した展覧会が終わり、やっと自分自身の制作にかかることになった。

ぼくは新しい作品制作に挑戦する意欲満々だけど、それを発表したいという気持ちも強い。大きな作品、木の実がおっ立った作品、流木オブジェ、こまごました小品。あっちに運んだり、こっちへ持って帰ったり。

だから、アシスタントのミシェルの心労は大変なものだ。でも、そんなことには、お構いなしで、描いて、創って、発表し続けた。

展覧会が有り過ぎて、自身でも何処でどんな展覧会に出しているのか、わからなくなる一年間だった。

今は、1月に名古屋で開催する個展の為の絵を描いている。

その展覧会「森の小径を辿りて」は、三年前から瀬戸内の高松の沖に浮かぶ大島に創っている「森の小径」という生きていて成長する植物によるアート作品に対するぼくの思惑を視覚化した平面作品と立体作品、それに木の実を使用した半立体的なレリーフを制作中だ。

「木の実」の作品で気がついたが、今まだ、もう一ヶ所で展覧会が開催中だ！それも東京のド真ん中。東京ミッドタウンガーデンにある「21-21 design.sight」で2月4日まで開催している『野生展』だ。民俗学者の中澤新一が企画プロデュースした「ケロヨン」から南方熊楠の顕微鏡まで並んでいる展覧会だ。そこに、ぼくの巨大な「木の実作品」が展開している。それは未成熟のモクレンを二万コ以上で制作した巨大作品。『獣の遠吠え』。



木の実や生きている植物を使ってアート作品を創るようになったのは、日の出の処分場建設反対運動の中で育まれたんだ。

東京都が三多摩地域の焼却灰を日の出町と青梅市の間に計画した東京ドーム7個分の巨大処分場予定地の真ん中に買取ったトラスト地。そこにぼくらは約三年間生活の場とした。ハイキングや狩猟や木の実拾いで森に入るのと違い、そこで生活すると森の生き物たちとの関わり方が大きく変化する。

今まで見えなかつたものが見えてきて、それを使ってアート作品を創り始めた。早速、専門誌に載せることになり、金井キクノさんが取材に来た。あの時は、ツルニンジンの花を使って作品を創り、それを撮影して誌面を飾ったので、あの植物を使った作品の写真は残ったのだが、ツルニンジンが生えていたエリアは焼却灰の底になった。そしてキクノさんは、もうこの世にいない。